

## ご挨拶

企画者 斧谷彌守一  
司会 森 茂起

森 甲南大学人間科学研究所所長の森と申します。本日司会を務めます。どうぞよろしくお願いします。

本日は暑いなか、多数ご参加いただきまして、大変ありがとうございます。今年の間科学研究所のシンポジウムは、「花の命・人の命」というテーマで開催することにいたしました。このテーマがなかなかユニークな成り立ち方をしていることについて、一言ご説明し、続きまして企画者の斧谷先生から内容の趣旨、企画の経緯など詳しく話していただきます。

この企画の背景には、一方で、斧谷先生が哲学、あるいは言語論といった専門の立場から、花と人との関わりに関心を持たれたという流れがあります。他方で、私が専門にしております臨床心理学からの関心があります。園芸療法や、芸術療法・箱庭療法といったイメージを用いた心理療法のなかで、花のイメージは大きな役割を果たしています。そうした二つの関心が合流して、今回のテーマが形成されているわけですが、さらにその両者の流れの背後には、阪神・淡路大震災の経験があることを付け加えておきたいと思っております。今回のシンポジウムの副題を、「震災一〇周年を記念して生命（いのち

を考える」としましたのは、そのためです。私たちは阪神・淡路大震災を通して、命の大切さや生命力の意味を考え直す機会を与えられました。斧谷先生のご関心も大震災後の経験の中で培われてきたものとお聞きしています。また、兵庫県が園芸療法に力を入れ、推進してきた背景にも、震災後の心のケアの広がりがあります。ですから、「花」という具体的なテーマを掲げておりますけれども、本日のシンポジウムの背後には、生命のあり方の一側面を考えてみようという目的があります。

その側面とは、震災に代表されるような破局的な経験に遭遇したときに、私たちの命が見せる、生き延びていく力、生き残る試み、またそこから回復する試みのことです。考えてみますと、そうした人間の営みは、生命が生き延びていく営み全体の一部と考えられます。文学、思想、芸術、あるいは私の関わっている臨床心理学も、大きく言えば人間が生きていく生命の営みの一部ではないかと考えています。私は、そういういった観点から、シンポジストの先生方との討論を通して議論を深めていけたらよいと願っております。どうぞ皆様方もご静聴いただき、また後のほうでは質問、質疑等の時間も設けますので、議論にも参加していただきたいと思っております。

それでは、斧谷先生にお譲りします。

斧谷 斧谷です。今回のシンポジウムは、私が主に企画しましたので、私のほうから、どのような形でこの企画が進んで

きたのか、その経緯を含めてお話ししたいと思います。

私がこのシンポジウムの企画を考えはじめたのは、二年半ぐらい前になります。そのとき「感性の変容」というテーマで、日本人の感性のあり方を考えてみたいと思い始めたわけです。自分はもともとドイツ文学出身で、ドイツやヨーロッパのものに憧れながら自分の研究活動を進めてきました。ところが、このところ、自分の中の日本的なものはいったいどうなっているんだろうと考え始めました。子供時代には明らかに、まだいっぱい古い日本的なものが周りにあって、そういうものに慣れ親しんでいたのですが、いったいそういうものは自分の中で今どうなっているんだろう、という疑問が生じてきたわけです。そこで、このテーマで企画を考えはじめ、いくつかのきっかけが重なって最初に思い浮かんできたのが、「花」という今日のテーマでした。

たとえば日本の美術の世界には花鳥画の伝統があります。あるいは花をうたう万葉以来の和歌の伝統があります。「久方の光のどけき 春の日に しづ心なく 花の散るらむ」のような歌のことです。そういうところはずっと言われてきたことは、花を素材にして、美のはかなさや無常観をうたうといったことです。しかし、そのようなあり方についてはこれまでに散々言われてきたし、どうもそれだけでは飽き足りないと思ひ始めました。同じ花を扱うにしろ、もっと生々しい花の生命性に迫っていききたいという気持ちになってきたわけです。

今、森先生がお話しされたとおり、今年はずいぶん震災

一〇周年に当たります。企画をしながら、震災のことを思い出しました。あれは一月一七日で、非常に寒いときでしたね。それがだんだん暖かくなって、瓦礫のかたわらから草が出てくる。そして花が咲く。そういう光景を見て、誰しもが慰められ、生きていこうという願いを呼び覚まされるという経験をしたわけです。つまり人間と植物の間の交流が行われている。花や緑によって人間は励まされ、あるいは癒しを感じる。「相」という字は「きへん」に「目」がついていますね。漢字学者の白川静は、「木と人間の目が相対しつ、呪的な関係に入る」という成り立ちをした漢字であると言っています。もともと植物、「木」と人間とは、そういうお互いに交流し合うような関係性があつたということのようです。

ここで、震災関係の写真を見ていただきたいと思います。震災で焼かれた木があります。これが神戸市長田区にある御蔵南公園に立っているクスノキです（巻頭写真①）。これは遠くからですと、何の変哲もない小さな公園にクスノキが立っているようにしか見えません。しかし近づいてみると、このように黒く焼け焦げた跡が今でも残っていて、保護するために網がかかっています。半分以上焼けたそうです。これをさらに拡大しますと、このように焼けただれて、黒く炭化した跡が残り、その間にざっくりと口を開いたところがあります（巻頭写真②）。上の部分を見上げると添え木がされています。焼けただれて、その跡が剥落したんでしょね、つるりとした白いところも見えています。ところが、一番上を見上げると、このように非常に元氣なんですね。この木の傷跡が

完全に癒えて、完治するにはほぼ四〇年かかるだろうと言われていました。修学旅行生がこれを見にくることもあるそうですが、このクスノキを見てみると、木の持つている生命性が、人間に非常に力強く伝わってきます。このように植物の生命性と人間の持つている生命性が通い合う、という側面にアクセントを置いた形でシンポジウムを企画したいと思ったわけです。

これが今日のシンポジウムのポスターです（巻頭図1）。このポスターはプロがデザインしましたが、左上の絵と色に関しては私が指定したんです。赤い色というのは花の赤い色でもあり、かつ、人間の血の色でもあるという想定をして、この色を選びました。左上の絵は三岸節子さんの「さいたさいたさくらがさいた」（一九九八）という作品です（巻頭図2）。本当に生命のエネルギーが渦巻いているという感じがします。矛盾していますが、生命エネルギーの重さが渦巻いているのを感じられ、同時に、そこにある種の軽さも感じられる。重さと軽さがないまぜになったような、生命エネルギーが渦巻きとなった絵だと思えます。驚異的なのは、一九〇五年生まれの三岸さんが、この作品を一九九八年に描いた、つまり、九三歳のときに描いた、ということです。

「花」という言葉に関して最後に触れておきますと、フラワーの「花」とノーズの「鼻」、それから、「初めから」という意味で「端（はな）から」と言う場合の「端」、これらは全部語源が同じではないかと言われています。それから葉っぱの「葉」、口の中の「歯」、これも全部語源的に同じだと。これは生命活

動の突端、先端、生命活動があふれている突端ということであり、これら全部の言葉がそのことを表しているのではないかとこの説もあります。

ということ、今日は花の生々しさを巡って、さまざまな分野からアプローチをしていただけるのではないかと思っております。

